

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520336

研究課題名(和文) 近世フランス文学における自己言及性の諸様態とその射程

研究課題名(英文) Self-reference in early modern French literature

研究代表者

石川 知広 (ISHIKAWA, Tomohiro)

首都大学東京・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号：50145645

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：自己言及性は近年さまざまな分野で注目を集める概念であるが、これを方法として文学研究に応用する試みはこれまで殆どなかった。本課題においては、主にフランス近世文学に軸足を置きながら、モンテーニュ、パスカル、18世紀匿名出版文学などの分析を行い、本概念が有する豊かな可能性を浮き彫りにしようと努めた。具体的に言うなら、自己言及性の審級は、作者とテキストの関係のみならず、テキストのそれ自体への関係においても根源的なものであること、さらには、同時代の他のテキストとの間テキスト性も、テキストに内在する自己言及性によってはじめて可能になるのではないかと、という見通しを立てることが可能になった。

研究成果の概要(英文)：The self-reference is a concept which nowadays gets into limelight in many branches of knowledge. But it is not so common to apply this notion to the studies of literature itself. In our research program, we have endeavored to demonstrate its rich potentiality for literary text studies by analyzing some cases of early modern French literature, i.e. Montaigne, Pascal and the underground literature in 18th Century France.

研究分野：フランス文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：フランス文学 フランス語 自己言及性 近世

### 1. 研究開始当初の背景

従前、首都大学人文社会系フランス文学教室では、伝統的な時代区分に基づいた各スタッフの専門領域に従い個別の研究に従事することが一般的であり、あまり連携研究を重視しない傾向があった。しかし、諸般の事情でスタッフ数が減少し、各自がカバーすべき範囲が広がるとともに、従来の研究方法に頼るだけでは昨今の領域横断的な新しい動向に取り残される恐れも感じられるところであった。そのため、科学研究費補助金の申請を契機に、あくまでスタッフ各自の専門分野を出発点にしつつも、共通の問題関心を形成するテーマがないかを検討した。その結果、自己言及性という共通概念のもとでなら、有意義な領域横断的研究ができるのではないかとの見通しが立ち、研究計画の作成に至ったものである。

### 2. 研究の目的

自己参照性(再帰性、自己回帰性等々)は、近年さまざまな分野で注目を集める概念群である。ざっと見渡しても、数学におけるフラクタル、生成文法、情報科学、理論社会学、マクロ経済学、遺伝・発生学、形態生物学など数多くの適用例が見られる。それが単なる偶然なのか、人間の知の構造(脳の情報処理過程)そのものに由来するのか、あるいは創造主の働きによるのか、そうした深遠な問題はさておき、人為に話を限れば、ある種の絵画や音楽は、自己言及原理を積極的に用いて特別な興味を生み出すことに成功しているし、そもそも芸術の根幹には遊び、すなわち模倣と反復の衝動が隠れている。模倣と反復を相同の機械的な繰り返しと考えると、ことほど浅はかな誤解はない。人間は決して全く同じことを繰り返すことができず反復には必ず「ずれ」が伴うのだが、このずれこそがすべての新しいものの産出原理であるといつてよい。ひとつだけ例を挙げれば、生物進化とはまさに遺伝情報の転写反復のエラーから生じるものであろう。

文学では、作家が自己を話題とするとき自己言及の多くの様相が明瞭に現れることは見易い道理である。また、作家がある時代の文化の実践者である限りにおいて、作家の自己言及は文化自体の自己言及とみなすことができる。いわゆるインターテクスチュアリティのような概念も、文化における相互参照と考えればまさに文化自身の自己言及性の現れにほかならない。これは言語にも当てはまるので、ひとつの言語(ラング)は、その言語を使用する人間集合の言語実践の中でしか現実化されないことから、ある生きた個人、とりわけ最も高度な言語意識を備える作家の言語使用は、言語自身の自己回帰的反復の様相を呈するだろう。そしてまさにそのことによって言語の創造が可能になるのである。そう考えれば、言語を素材とする文学が、こうした言語の再帰性ないし自己参照性が

ら大きな糧を得ていることも不思議ではない。いわゆる「作者の死」も、こうした観点を極度に拡大したものと考えればそれほど大袈裟でも理解困難でもない。

本研究の目的は、こうした自己言及性の概念を用いて、4人のスタッフの本来の研究領域である、1)生成文法理論によるフランス語統辞論、2)モンテーニュ『エッセー』、3)パスカル『パンセ』、4)18世紀フランス地下文学(特にロベール・シャル)を貫く一般原理のようなものがあるか、仮にあればそれはどのようなものであるかを探求することにある。

### 3. 研究の方法

(1)生成文法的統辞論における言語の自己言及性、『エッセー』における作者モンテーニュの二重化(語られる対象と語り手)とその独自のエクリチュール、『パンセ』におけるテキストの不可能性、匿名出版における作者と作品のすれ違う関係性 これら4テーマのもとに各自が個別研究を行うと同時に、それぞれの領域で姿を表す自己言及性のあり方を定位する。

(2)上述の個別研究の成果を持ち寄って定期的にディスカッションを行う場を設け、それぞれの発見に共通する自己言及性のあり方がないか探求に努める。

### 4. 研究成果

(1)各自の研究成果は以下の通りである。

小川は、フランス語接頭辞 re のシンタクスを生成文法のミニマリスト・アプローチにより分析した。生成文法において自己言及性は再帰性として現れ、極めて重要な概念となっているが、この論考のように、接頭辞の生成を語形成からではなく統辞論から説明する野心的な試みはこれまであまりなかったものである。また、これに関連して、時代と地域を異にする複数の個別言語を手掛かりに普遍的な統語構造の一端に触れることもできた。

大久保は、二つの論文において、著者モンテーニュ自身と重なるとともに常に微妙なずれを伴う『エッセー』のエクリチュールを自己言及性の観点から捉えなおすことを目指した。特に、作品構想に関する方法的模索自体が作品化されている点、また、悲観的認識論における実存的関心が自己言及性と結びつく点が明らかにできたことは一定の収穫であるといえよう。

石川は、大量の紙の断片に残された『パンセ』自筆手稿におけるテキストの散乱と異形について、自己言及性もしくは自己回帰性の概念を用いて分析を行った。また同時に、これと密接に関連して、手稿をもとに編纂される『パンセ』刊本の不可能の可能性についても考究した。

藤原は、最近注目され始めたロベール・シャルを中心に、匿名出版における作者と作

品の関係性について、自己言及性の観点から考察を行った。その結果、同時代の知的状況のなかで特異な光輝を放つ『宗教についての異議』における匿名性のあり方に新しい解釈を与えることができた。

(2) テキスト生産者としての作家は、才能ある個人であると同時に、文化の集合知の中でのみ活動を行う。とりわけ言語は、作家以前に存在すると同時に作家によって創出されるものでもある限りで、作家のうちに自己言及性として現れる。作者とはこの意味で、文化と言語の自己言及性がそこに特異的に顕現するような特権的な場所ということができる。

こうした作者の特異なあり方は、今回の研究課題遂行の過程で、とりわけ『エッセー』と『パンセ』において、極めて顕著に表れることが明らかになった。すなわち、『エッセー』に関しては、自己についてのみ語る語り手のテキストは、同時に自己についての語りとして生成されるテキスト自身のあり方をも好んで話題にすることによって、ある実存的覚悟性への通路を垣間見せるのである。また『パンセ』について言うなら、おびただしい断片=断章と化したその原テキストは、それ自身とも作者とも異物である編集の暴力の介在なしには書物たり得ないにもかかわらず、むしろ裸形のテキストの深淵として自立し、異形の書物の不可能な到来を指示し続ける。つまり、『パンセ』におけるテキストの散乱と深淵は、本来的に名をもたないテキストの自己言及的回帰として捉えることができるのである。

これとはまた別の意味で、18世紀の地下出版文学における作品と作者の関係は、改めて問い直すに値するものをもっている。そこでは、匿名出版ないし出版放棄選択の現実的動機はさまざまでありつつも、特にシャルルという「軍人哲学者」のテキスト産出行為においては、革命、すなわち再生のための自己破壊へと向かうフランス社会の自己言及的状況が強く関わっていることが推定できるといえる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

小川定義、フランス語接頭辞 re- アスペクトのシンタクス、近世フランス文学における自己言及性の態様とその射程(成果報告論文集) 査読なし、2014、53-89

太久保康明、モンテーニュにおける「自己言及性」緒論、近世フランス文学における自己言及性の態様とその射程(成果報告論文集) 査読なし、2014、5-13

太久保康明、『エッセー』における作品構想の諸位相、近世フランス文学における自己言及性の態様とその射程(成果報告論文集)

査読なし、2014、15-30

石川知広、『パンセ』と書物の自己回帰、近世フランス文学における自己言及性の態様とその射程(成果報告論文集) 査読なし、2014、91-116

藤原真実、共有物としての作品 ロベール・シャルルと匿名の問題、近世フランス文学における自己言及性の態様とその射程(成果報告論文集) 査読なし、2014、31-51

石川知広、怪物と毒と悲劇の時間 ラシーヌ『フェードル』をめぐって、人文学報、査読なし、481号、2013、141-172

藤原真実、恋愛地図で読む『美女と野獣』連作的読解の試み、人文学報、査読なし、466号、2012、1-39

藤原真実、跪く女・運命の女 シャール、プレヴォー、デイドロと描写の問題、人文学報、査読なし、451号、2011、37-75

〔学会発表〕(計1件)

藤原真実、L'anonymat et la paternité en 1713、Colloque international du tricentenaire des *Illustres Françaises* de Robert Challe、招待講演、パリ、2013年12月9日 11日

〔図書〕(計1件)

植田祐次、藤原真実他、世界思想社、ヴォルテールを学ぶ人のために、2012、120-143

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

石川 知広 (ISHIKAWA, Tomohiro)  
首都大学東京人文科学研究科・教授  
研究者番号：50145645

(2)研究分担者

大久保 康明 (Ohkubo Yasuaki)  
首都大学東京人文科学研究科・教授  
研究者番号：70168897

小川 定義  
首都大学東京人文科学研究科・教授  
研究者番号：40268967

藤原 真実 (FUJIWARA, Mami)  
首都大学東京人文科学研究科・教授  
研究者番号：10244401